編 集 後 記

昨今,「データサイエンス」なる言葉をしばしば耳にするようになったが，その意味するところについて明確なイメージを持つ研究者は少ないのではないか．かく言う自分も，それが統計解析手法の発展を目指すものなのか，社会の多様なデータを解析するためのフレームワークの構築やその実装を目標とするものなのか，或いは，そうしたデータに基づいてよりよい社会を実現する方法論を深耕するものなのか，捉えどころがない印象を拭えなかった．

そうした状況にあって，2021年11月に「ヘルスデータサイエンス学会」が産声を上げた．ここで,「データサイエンス」の頭に「ヘルス」がついたことで，私のモヤモヤ感は一気に解消した気がする．何故なら,「ヘルスデータ」と言えば，臨床研究や疫学研究のデータ，電子カルテのデータ，健康診断や要介護認定のデータ，各種整体計測のデータ等をはじめとして，そのイメージは明確であり，また，それらを扱う科学的・技術的基盤も既に一定程度整備されているからである．同時に，その主たる目的が個人や集団の健康増進，或いは，公共福祉の増大であるという点に疑いの余地はないからである．すなわち，私なりには，ヘルスデータサイエンスを，健康や疾病に関係する様々なデータから人々の健康増進や公共福祉の増大に役立つ情報を紡ぎ出すための科学として捉えている．

しかしながら，サイエンスとは実体がないものであるが故，それを人間と結んで具現化し，成果を社会に還元するためには，何らかのインターフェースが必要になる．そのインターフェースになるものが臨床研究や疫学研究であり，また，それらを支える技術，すなわち，各種研究の方法論や統計解析手法，データ／メタデータ構造，データ収集・管理システム等である．このように考えると，ヘルスデータサイエンスの概念がくっきりとイメージされ，それが様々なインターフェースと共に発展していくものであることが分かる．そして，これらの要素を総合的に推進する使命を担うのがヘルスデータサイエンス学会ではないか．

この度，2022年11月，ヘルスデータサイエンス学会 第1回学術集会が開催され，同学会として大きな一歩を踏み出した．本特集号は，その講演録として，わが国におけるヘルスデータサイエンスの発展に向けた布石であり，また，今後進むべき道筋を照らす明かりとなるであろう．

（永井洋士）